

平成二十七年歌会始御製御歌及び詠進歌

本

御製

夕やみのせまる田に入り稔りたる稲の根本に鎌をあてがふ

皇后陛下御歌

来し方こに本かたとふ文ふみの林ありてその下陰いくどに幾度いこひし

皇太子殿下

山あひの紅葉深まる学び舎に本読み聞かす声はさやけし

皇太子妃殿下

恩師より贈られし本ひもとけば若き学びの日々のなつかし

文仁親王殿下

年久としひさしく風月ふげつの移ろひ見続けし一本の巨樹に思ひ巡らす

文仁親王妃紀子殿下

日系の若人かたりぬ日本へのあつき思ひと移民の暮らしを

眞子内親王殿下

呼びかける声に気づかず一心に本を読みたる幼きわが日

佳子内親王殿下

弟に本読み聞かせるたる夜は旅する母を思ひてねむる

正仁親王妃華子殿下

新しき本の頁ページをめくりつついつく迄読まむと時は過ぎゆく

寛仁親王妃信子殿下

松山に集ひし多くの若人の抱へる本は夢のあかしへ

彬子女王殿下

数多ある考古学の本に囲まれて積み重なりし年月思ふ

憲仁親王妃久子殿下

来客の知らせ来たりてゆつくりと読みさしの本にしをり栞入れたり

承子女王殿下

霧立ちて紅葉の燃ゆる大池に鳥の音響く日本の秋は

御製

夕やみのせまる田に入り稔りたる稲の根本に鎌をあてがふ

天皇陛下は、毎年、春には種籾をおまきになり、初夏には二百株を何日かに分けてお田植えになり、秋には同様にして稲を刈り取られます。この御製は、秋の夕闇が迫る中、稲刈りをなさっている時のことをお詠みになったもの。

(なお、一部は根付きの稲として、神宮の神嘗祭にお供えになります。)

皇后陛下御歌

来し方に本とふ文の林ありてその下陰に幾度いこひし

丁度林の木陰で憩うように、過去幾度となく本によって安らぎを得てこられてきたことを思い起こされ、本に対する親しみと感謝の気持ちをお詠みになったもの。

皇太子殿下

山あひの紅葉深まる学び舎に本読み聞かす声はさやけし

皇太子殿下は、昨年十月、第三十八回全国育樹祭に御臨席になるため、山形県に行啓になりました。このお歌は、その折、山形県最上郡金山町の金山町立金山小学校を訪れられ、地域の読み聞かせボランティアのおはなしサークル“きつねのボタン”が、小学生たちに絵本（泣いた赤鬼）を読み聞かせている様子を御覧になった御印象をお詠みになったものです。

皇太子妃殿下

恩師より贈られし本ひとけば若き学びの日々のなつかし

皇太子妃殿下には、英国オックスフォード大学大学院生時代の恩師から御著書を戴かれた折に、その御本を少しずつお読みになりながら、オックスフォードでの学生生活を懐かしく思い出されました。そのお気持ちをお詠みになったものです。

文仁親王殿下

としひき ふげつ
年久しく風月の移ろひ見続けし一本の巨樹に思ひ巡らす

秋篠宮殿下は、昨年十月にグアテマラ国とメキシコ国を訪問されました。メキシコ国オアハカ市では、「トゥーレの樹」という、樹周世界一としてギネス世界記録に掲載されている樹齢千数百年の巨樹を見学されました。以前からご覧になりたいと思われていた樹を実見されて、あらためてその巨大さを感じられるとともに、長い年月にわたってその場所の移ろいを見てきたこの樹に思いを馳せられたことをお歌にお詠みになりました。

文仁親王妃紀子殿下

日系の若人かたりぬ日本へのあつき思ひと移民の暮らしを

秋篠宮妃殿下は、昨年一月から二月にかけてペルー国とアルゼンチン国、十月にはグアテマラ国とメキシコ国を、秋篠宮殿下と共に訪問されました。これらのご訪問の際には、日系の人々にお会いになる機会がありました。その折に日系の若い人たちが、日本を思うあつい気持ちと移住してきた人々の暮らしを語ってくれたことを想い出されながら、お歌をお詠みになりました。

眞子内親王殿下

呼びかける声に気づかず一心に本を読みたる幼きわが日

眞子内親王殿下は、小さい頃から読書が大変好きでした。お食事の時間も忘れ、両殿下が呼ばれていることにもお気付きにならず、夢中でご本をお読みになっていたご幼少の日を思い出されて、お歌にお詠みになりました。

佳子内親王殿下

弟に本読み聞かせるたる夜は旅する母を思ひてねむる

佳子内親王殿下は、お姉様の眞子内親王殿下が外国にいらっしやる最近では、秋篠宮同妃両殿下が地方や外国をご訪問の折に、悠仁親王殿下とご一緒にお過ごしになります。夜、お休みになる前の悠仁親王殿下にご本の読み聞かせをなさって、秋篠宮妃殿下のことを思い出されるときのことをお歌にお詠みになりました。

正仁親王妃華子殿下

新しき本の頁^{ページ}をめくりつついつく迄読まむと時は過ぎゆく

寛仁親王妃信子殿下

松山に集ひし多くの若人の抱へる本は夢のあかしへ

昨年、日本青年会議所第六十三回全国大会松山大会お成りの折、ご公務にお出まし遊ばされ、大勢の方々に迎え入れていただきました情景を詠まれたものです。

彬子女王殿下

数多ある考古学の本に囲まれて積み重なりし年月思ふ

昨年四月、トルコのイスタンブール考古学博物館にあるトルコの考古学の父と言われるオスマン・ハムダイの図書室でご講演をされました。その図書室にトルコが歩んできた悠久の歴史と、その古代から連綿と続く時の流れを感じられて詠まれたものです。

憲仁親王妃久子殿下

来客の知らせ来たりてゆつくりと読みさしの本にしをり栞入れたり

友人に薦められた本がとても面白く半ば夢中で読んでいた折、来客の報せを受け、現実に取り戻されたくないと思いつつも静かに本を閉じる、そのような一瞬の感情を詠まれたものです。

承子女王殿下

霧立ちて紅葉の燃ゆる大池に鳥の音響く日本の秋はにほん

秋、大雨が上がって犬の散歩に出ると、大池に立ち上る真つ白な霧と深紅の紅葉とのコントラストがとても美しく、また静けさの中に響く鳥の羽音や声が大変印象的で、この歌をお詠みになりました。

召人 春日真木子

緑陰に本を繰りつつわが呼吸いきと幸さきくあひあふ万の言の葉

選者 篠 弘

送られし古本市のカタログに一冊をよ選るが慣ひとなりぬ

選者 三枝昂之

音読の聲が生まれる一限目明日あすへ遠くへ本がいざなふ

選者 永田和宏

本棚の一段分にをさまりし一生ひとよの量かさをかなしみにけり

選者 今野寿美

秋の気の音なく満ちて指先に起こしては繰る本こそが本

選者 内藤 明

開かれて卓上にある一冊の本を囲みて夕餉ゆふげのごとし

選 歌 (詠進者生年月日順)

奈良県 伊藤嘉啓

若き日に和本漁りぬ京の町目方で買ひし春の店先

新潟県 吉樂正雄

おさがりの本を持つ子はもたぬ子に見せて戦後の授業はじまる

愛知県 森 明美

竹垣の露地に仕立てた数本の太藺ふしゐゆらして風わたりけり

長野県 木下瑜美子

大雪を片寄せ片寄せ一本の道を開けたり世と繋がりぬ

千葉県 平井敬子

「あつたよねこの本うちに」流された家の子が言ふ移動図書館

埼玉県 森中香織

本棚に百科事典の揃ひし日に父の戦後は不意に終はりぬ

茨城県 五十嵐裕治

二人して荷解き終へた新居には同じ二冊が並ぶ本棚

神奈川県 古川文良

雉さんのあたりで遠のく母の声いつも渡れぬ鬼のすむ島

岡山県 中川真穂子

暑い夏坂を下ればあの本のあの子みたいに君はゐるのか

神奈川県 小林理央

この本に全てがまつてるわけぢやないだから私が続きを生きる

佳 作 (詠進者生年月日順)

東京都 原澤昇司

初買ひは「フランダースの犬」ときめ孫に道みち粗筋きかす

愛知県 林 多恵子

子ら去りし本箱に差す月あかりミヤマクワガタ図鑑に眠る

青森県 八木田順峰

図書館の三十万分の一本「梁塵秘抄」を選びて読みだす

鹿児島県 有馬徹夫

コンバイン後もどりさせ一本のたふれし稲をすくひ刈り取る

長野県 藤沢庄吉

手締めする一本締め of 皆揃ひ小さな村の役員決まる

東京都 齋藤洋子

良しの説出づれば悪しの説もでて健康本は花ざかりなり

福岡県 大橋拾子

かたまりて静かに絵本を見る園児どんぶらこつこで身体を揺らす

埼玉県 青木 功

本籍は島根の埜の十六島心離さず東京住まひ

埼玉県 中川八枝子

水糸の二本を夫と持ち合ひて声を掛けつつ畝作りする

京都府 中村悦子

離れ住む父は本音をふと洩らす用件だけの文の終はりに

岐阜県 江尻恵子

本州を内地と呼びし若き日の津軽海峡は荒れて横たふ

兵庫県 箱根知子

それぞれに本一冊を入れ終へて夫婦の旅の支度整ふ

北海道 矢本郁郎

古本のしをり代りの切符には夏の日付と学割の印

京都府 高橋武司

木もれ日は西條八十にとどきをり糺の森の古本市に

奈良県 丸森珠実

また今日も私は本に負けるのか君の視線を奪つてやりたい

滋賀県 花谷風薫

本の虫私がすすめて読んでゐる君が上巻私が下巻

奈良県 安部風花

周囲から頑張れといふプレッシャーだから本心隠してしまふ